

2023 年度「中国ろうきんN P O 寄付システム」応募用紙_様式 2

1. 坂町でも、放課後にひとりで自宅にいることが不安な子どもたちが存在しています。この課題に対処するため、町内の空き家を活用し、毎週1回のペースで子供たちが集まり、放課後を一緒に楽しく過ごす機会を提供している。また、夏休みには公民館や集会所を借りて、夏休みの子どもの居場所づくりや夏祭りのイベントを開催した。0 日間で300名以上の子どもたちが集い、宿題やゲームをして過ごした。この活動には、保護者や地域の自治会役員（高齢者）、元教員などがボランティアとして参加しており、勉強や遊びを通じて子どもたちの仲間作りを促進するだけでなく、多世代が集まる地域交流の場ともなっています。口コミにより、知名度が広がり、毎回約30名の子どもたちが参加しています。また、子どもたちの中には十分な食事を摂っていないケースも見受けられ、そのためにフードバンクから受け取った食材を利用し、簡単な食事やおやつを提供することで、子ども食堂のような役割も果たしています。今後の課題としては、学校では見えない子どもたちの辛い気持ちや家庭環境の課題にどのように連携し、解決の一助になるかが挙げられます。学校や地域との連携を強化し、子どもたちがより安心して成長できる

【子どもの居場所づくり SKY ハウス】



【夏休みの居場所づくり 「みんなで宿題やれば怖くない」】

坂公民館



2023 年度「中国ろうきんNPO寄付システム」応募用紙_様式 2

2. 坂町にある 2 カ所の旧災害公営住宅でサロン交流会を、2020 年から毎月 1 回開催している。コロナ禍で中止の時期はありましたが、昨年からは毎月の開催が可能となった。あれから 6 年が経過し、入居者が高齢化しており、入居者が主体となつての活動が難しく、集いの場が減少している。自治会長は、「SKY が毎月サロンを開いてくれるのが有り難い。自治会がやると人間関係の好き嫌いで、参加しないひとがいる。でも SKY がやるサロンなら、会長の立場ではなく、みんなと同じ目線で『こんど SKY が花の寄せ植えしてくれるんよ。一緒に参加しよう』と気軽に誘うことができるという。

活動では、住民がやりたいことを企画し、住民が率先して参加してもらうことを心がけており、手を動かし、身体を動かし、食べて笑う機会になりつつある。ボランティアも広がって、閉鎖した地域ささえいセンターの元相談員が、入居者に引き続き寄り添いたいといい参加してくれている。顔見知りだからこそその支援が継続し、入居者の様子をみて行政の民生課に状況を連絡することもしている。また、広島大学のボランティアグループは、当初から参加してくれており、住民は「いま東京に息子はいるが、息子と話をしているよう。本当に嬉しい。元気をもらった」と言ってくれる。

SKY の活動そのものは、小規模で目立たないものであるが、被災地においてはとても大切なことだと感じる。坂地区 (Saka の S) 小屋浦地区 (Koyaura の K) 横浜地区 (Yokohama の Y) を一つに繋げていくことが災害復興まちづくりには欠かせない。そしてそのために欠かせない存在であり続けたい。

【旧災害公営住宅（現在、小屋浦 1 丁目町有住宅、北新地 2 丁目町有住宅）でのサロン活動】

ポッチャ



かまどベンチを使った炊き出し



花の寄せ植え



布染め体験



お茶会

